

# 外部評価報告書

令和元年 6 月

附属図書館

## 目 次

### 第 1 章 外部評価実施状況

1. 外部評価の概要	2
2. 外部評価委員会	3
3. 開催の記録（写真）	4

### 第 2 章 外部評価結果

1. 各基準の数値結果	5
2. 基準ごとの講評	7
3. 総合評価	17

## 第1章 外部評価実施状況

### 1. 外部評価の概要

#### (1) 開催日時

令和元年5月27日(月) 10:00～14:20

#### (2) 開催場所

静岡大学附属図書館浜松分館(浜松市中区城北3-5-1)

#### (3) 外部評価委員

三科 守 (静岡県立中央図書館・館長)

森 仁志 (名古屋大学附属図書館・館長、大学院生命農学研究科・教授)

山根 博 (富山大学学術情報部・部長)

#### (4) 静岡大学出席者

澤田 均 (附属図書館・館長、農学部・教授)

河本 映 (附属図書館・分館長、工学部・准教授)

大山 卓也 (学術情報部・部長)

吉岡 文 (図書館情報課・課長)

真中 進 (図書館情報課・副課長)

江口 敏一 (図書館情報課・副課長)

釜田香寿枝 (利用サービス係・係長)

高橋 里江 (分館サービス係・係長)

鈴木美奈子 (分館資料係・主任)

## 2. 外部評価委員会

### (1) 実施方法

外部評価委員に、事前に『自己評価報告書』（静岡大学附属図書館，平成31年3月）を送付した。

委員会当日は、(2)のスケジュールにより、視察や質疑応答のうえ、講評を受けた。

また後日、調査票により詳細な講評の提出を受けた。

### (2) 委員会当日スケジュール

10:00～11:20 午前の部開会  
出席者紹介  
委員長選出  
日程説明  
附属図書館概要説明  
静岡本館施設・設備紹介  
浜松分館視察

(休憩)

11:30～12:30 評価項目説明  
質疑応答

(昼食)

13:00～14:20 午後の部開会  
講評打ち合わせ  
講評  
今後の予定

14:20 閉会

### 3. 開催の記録（写真）



澤田館長の挨拶



浜松分館視察 — ギャラリー



浜松分館視察 — 読書テラス



浜松分館視察 — セミナールーム



浜松分館視察 — 個人ブース



外部評価委員による講評

## 第2章 外部評価結果

### 1. 各基準の数値結果

各基準について、外部評価委員に下記の4段階で評価を受けた。

- 4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。
- 3：概ね達成している。概ね適切・良好である。
- 2：改善が必要である。
- 1：抜本的な改善が必要である。

各委員の評価は次の通りである。

	A委員	B委員	C委員	平均
基準1 組織の目的	4	4	4	4.0
基準2 組織構成	4	4	4	4.0
基準3 教員及び支援者等	2	3	4	3.0
基準4 活動の状況と成果	4	3	3	3.3
基準5 施設・設備	4	4	4	4.0
基準6 内部質保証システム	4	4	4	4.0
基準7 管理運営	3	4	4	3.6
基準8 情報等の公表	4	4	4	4.0
基準9 地域貢献活動の状況	4	3	4	3.6
基準10 国際化の状況	3	3	4	3.3

ほとんどの基準で「3：概ね達成している。概ね適切・良好である。」または「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」であった。2つのキャンパスに2つの図書館が存在しているが、附属図書館委員会等を通じて、運営が円滑で調和がとれている点や活発であることは高評価であった。今後の浜松医科大学との統合・組織再編に向けては、サービス維持・向上への期待が示された。

「基準3 教員及び支援者等」については、1名の委員から改善が必要とされ、附属図書館が教育・研究を支援する機関であることから、専任教員の配置よりも図書館運営を熟知した専任

司書等の配置が重要であるとの指摘を受けた。また別の委員から、附属図書館の機能を充実させるためには常勤の図書館職員の増員が必要であるとの指摘を受けた。

基準4については、図書館の開館時間は1時限目授業の開始時間前とすることが望ましく、ぜひ検討するようとの指摘を受けた。

## 2. 基準ごとの講評

ここでは外部評価委員より提出された『自己評価報告書』の基準ごとの講評を記載する。

### 【基準1】組織の目的について

附属図書館の目的（使命、活動を行うに当たっての基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が、学校教育法に規定された、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A委員（評価4）

学校教育法第83条に規定された大学の目的に沿い、研究・教育を支援するための附属図書館としての使命、活動方針等を図書館規則等に於いて明確に定めている。

浜松医科大学との統合後に、将来計画を策定する予定であるという説明がなされたが、研究や教育の支援という点で、図書館としてのより良い方向性が打ち出されることを期待したい。

##### B委員（評価4）

計画通り順調に目的を十分に達成している。そもそも用いられている評価は一般的な研究科を想定した基準であり、附属図書館は研究科とは立場が異なるので、評価は4であるが、「大いに期待できる水準にはなり得ない」。現在の計画・目標を達成すれば、図書館として十分である。

##### C委員（評価4）

図書館の目的は、図書館規則で定められており、大学一般に求められる目的に適合している。また、大学の中期計画の「教育に関する目標」、「研究に関する目標」に図書館に関わる事項が記載されていることで、大学における図書館の目的が位置づけられているといえる。

図書館のホームページにおいて、静岡大学および附属図書館の使命が分かり易く掲げられていることは高く評価できる。

### 【基準2】組織構成について

基本的な組織構成が、附属図書館の目的に照らして適切なものであるか。  
活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。



## <外部評価委員によるコメント>

### A委員（評価4）

静岡キャンパスと浜松キャンパスの2つがあり、附属図書館もそれぞれのキャンパスに存在しているが、各々の独自性とともに関属図書館委員会等を通じて、組織的連携・統一性が確立されており、大学全体としての図書館運営は円滑になされている。

### B委員（評価4）

静岡大学の場合、附属図書館は静岡本館と浜松分館に分かれている。両館の特性を生かして運営が順調に行われているようなので、高く評価したい。

電子リソース、特に電子ジャーナルに関しては各大学とも悩ましい問題である。平成26年度より電子リソース検討委員会を設置して検討しているようであるが、各部局が「予算内で」合意できる適切な案が出せているならば望ましい。しかし、この問題は附属図書館関係者が労力を割けば解決できる問題ではない。狭い範囲で解決するならば大学執行部がどこまで予算を電子ジャーナルに配分するかに関わる。さらなるタイトルを増やすことは難しいと予想できるが、現状を維持することができれば十分であると判断をせざるを得ない。

一方、文部科学省から、オープンサイエンス・オープンデータ推進が提示され今後対応せざるを得ない。大学によってこの範囲の推進をリードする組織は異なるであろうが、附属図書館だけで対応できるはずがなく、情報基盤機構等と連携して対応するよう取り組んで欲しい。

むしろ気になることは浜松キャンパスが別の組織になった場合に、どのように運営するのかである。全体の運営は重要であるが、電子ジャーナルの契約も気になる。これまでの出版社の態度から想像できる最悪のパターンは、それぞれのキャンパスが別の契約になる可能性である。ここを考慮して交渉する必要があるだろう。

### C委員（評価4）

附属図書館が設定する目的に対し、適切な組織・運営体制が整備されている。静岡、浜松という離れた2キャンパスにおいて、館長・分館長の分担・連携体制が整備され、適切に運営されている。また、重要事項を審議する附属図書館委員会、その下に両キャンパスにワーキンググループを設置し、学生図書選定部会、図書館通信編集委員会、自己点検・評価実施委員会にも図書館委員会委員が参加するなど、きめ細かな運営体制が整備されている。

また、図書館の重要事項であり、全学の研究基盤として必要不可欠な電子ジャーナル等について審議する電子リソース検討委員会が、理事、学内部局の長を中心に構成されているこ

とは高く評価できる。

### 【基準3】 教員及び支援者等について

必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、適切な基準が定められ、それに従い適切な運用がなされているか。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A 委員（評価2）

当日の評価委員会においても意見として出されたが、大学附属図書館は、研究や教育を行う機関ではなく支援する機関である。専任教員による図書館運営組織を構築するより、図書館運営を熟知した専任司書等の職員を配置することが重要であると考えられる。選書など含め、図書館機能の向上のために教員の力が必要な場面は多々想定されるが、それは、図書館職員と教員との連携・協力で対応できるのではないか。そういう意味での評価「2」である。

##### B 委員（評価3）

この基準も用いられている評価は一般的な研究科を想定した基準であり、附属図書館は研究科とは立場が異なることを考慮する必要がある。私の解釈では大学の附属図書館は研究・教育の支援組織であり、研究や教育をする組織ではない。予算がある場合に専任教員を配置する可能性を否定しないが、原則として附属図書館の運営に専任教員を必要としない。人事に関する問題を考慮するならば、附属図書館の機能を充実させるためには常勤の図書館職員の増員を大学執行部に要求するべきである。

##### C 委員（評価4）

前回の外部評価において専任教員の必要性が指摘されているとのことであるが、その後行われた要求では実現しなかった経緯を考えると、自己評価書に書かれているように「課題に応じて関連教員や組織と連携・協力すること」が今後の方向性としては適切であり、国立大学図書館協会ビジョン2020の重点領域3、目標1)新たな人材の参画にも合致するものと考ええる。

今後とも、学内の教員、組織等とのより一層の連携をすすめることを期待したい。

#### 【基準4】活動の状況と成果について

組織の目的に照らして、学内共同教育研究施設等としての活動が活発に行われ、成果が上がっているか。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A委員（評価4）

当日の評価委員会でも指摘されたが、講義開始時間（午前8時40分）より早い時間に開館（現在は午前9時）できれば、学生のニーズに一層応えるサービスの提供ができるのではないか。それへの対応について、困難な課題があることも理解できるが。

貸出冊数が一定冊数で推移しているのも、図書館の蔵書については利用者の要望に応える内容であるといえると思う。

新入生を対象とした図書館利用セミナーは、職員の負担もあると思うが、その後の学生自身の研究に役立つ施設であることを理解させるうえで、そしてその利用のためのリテラシーを習得する上で、とても有益な支援である。

学生モニターの活動は、他の学生たちに刺激を与えるうえで、そして図書館運営の活性化にとっても評価できる。「学生が作る棚」なども、斬新的である。

##### B委員（評価3）

基準4に関わらず、様々な基準において問題となる点は突き詰めれば、運営費にかかわってくる。

全体として概ね活動していると判断できるが、この類の話は改善するようにコメントをすればいくらかでもだせる。例えば開館時間は延ばした方が望ましいと、指摘したい。試験期間の土・日・祝日の開館時の延長は評価したいが、そのことよりも開館時間を早めた方が学生のニーズに応えられると思う。講義の制限目が8:40ならば少なくとも8時から開館したい。時間外開館を外部委託業者に委ねるためには経費が問題になるであろうが、自助努力できるとすれば、バイトで雇用する学生をトレーニングするしかないだろう。

図書館経費の中でも学生用資料は、特に学部学生のために必要不可欠という判断のもと、間接経費を駆使しているようである。図書館自体には間接経費を増やすことはできない。各研究科で外部資金を取ってもらうしか間接経費を増やすことはできない。これは附属図書館の問題ではなく、大学全体に関わる問題である。

別の見方をすれば、運営費交付金の増額は望めないのも、基金やクラウドファンディングから寄附を集めることしか対応できない。この点についても努力の成果は認められるが、寄附金に満足などない。具体的な案を考えて、さらなる努力が必要である。

## C 委員（評価3）

### 1) サービス

平日の開館時間が9時となっているが、いくつかの大学では、授業開始時間前に利用できる8時開館も実施されている。是非授業開始時間前の開館を検討・実施して欲しい。

学生モニターを活用し、学生の意見収集、学生による選書などが活発に行われている点が評価できる。

情報リテラシー教育・学修支援において、図書館利用セミナーが活発に行われている点は高く評価できる。今後は、教員等との連携によりレポート、論文等の書き方講習会などを企画されることを期待したい。

### 2) 教育研究資料

学生用図書費が大きく減少している点は、現在の状況からやむを得ない面もあると考えるが、電子リソース経費との分離などにより以前の水準に戻せるような努力をお願いしたい。

電子リソースについては、間接経費の導入などにより3大パッケージを維持するなど、適切に対応されている点が高く評価できる。

### 4) 外部組織との連携・学外活動

国立大学図書館協会の各種委員会への参加、静岡県大学図書館協議会の会長館を務めている点、JUSTICE、DRF、JPCOARなどの外部組織の活動に積極的に関わっている点が高く評価できる。

### 5) 活動基盤の整備

電子リソース経費への間接経費からの充当、浜松分館整備特定基金の設立等財源の多様化が進められている点が評価できる。

## 【基準5】施設・設備について

目的に対応した施設・設備が整備され、有効に活用されていること。また、学生のニーズへの対応がされているか。

## <外部評価委員によるコメント>

### A 委員（評価4）

浜松分館は昨年、リニューアルオープンされたばかりだけあり、明るく開放的でゆったりとした知的空間が確保されているのが印象的であった。本館・分館とも学生たちが静謐な環境で研究できる従来型のフロアと、複数人で意見交換し、語らいながら課題を考察するラーニングコモンズが設置されており、多様な学習スタイルに対応できる工夫がなされている点

を評価したい。

静岡本館、浜松分館とも、改修等により施設設備面でのユニバーサルデザインが取り入れられ、利用環境の改善努力がなされている。

閉架書庫へ出入りする際の入退室システムは安全面確保の点で貴重である。

#### B 委員（評価 4）

改築したこともあり浜松分館では、ラーニングコモنزのスペースも用意され、グループ学習スペースも設けた。読書テラスなどユニークな設備も用意され、全体として使い勝手のよい環境に近づいたようである。ラーニングコモنزのように学生間で議論ができるスペースは、各大学で活動している状況である。このような環境はこれまでの大学の図書館にはなかったものであるが、相変わらず個人ブースは要望が多いただろう。スペースが必要なので簡単にはいかないと思うが、個人ブースの数が両館共に少ないと感じる。どのように配慮すれば設置が可能になるのか分からないが、設置すれば希望者は常にあると思う。一方、バリアフリーに対する設置は十分ではないようである。特に静岡本館は段差が多いただろうから、早急に対応した方がよいただろう。この類の施設は障がい者が在籍しているいないにかかわらず準備しておかないと、本当に必要になったときに対応できない。

#### C 委員（評価 4）

静かに学修できるスペース、グループで共同学修ができるスペースが整備されている。特に浜松分館は、全般的にゆったりと机が配置され、グループで共同学修ができるスペースが充実し活発に利用されている点、特徴あるスペースも随所に配置されている点（読書テラス、セミナールーム・CALL 教室など）が高く評価できる。

#### 【基準 6】 内部質保証システムについて

活動状況について点検・評価し、その結果に基づいて活動の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A 委員（評価 4）

組織としての PDCA サイクルが円滑に機能している。図書館サービスの質の保証に直結しているシステムであると判断する。

実施に於いて、多大な時間と労力が傾注されていると思うが、ルーチンの業務と並行しての作業であり、もう少し重点化・効率化してもよいのではないか。

#### B 委員（評価 4）

利用学生モニターを用いるなど意見をとりいれているので、十分に反映されている。  
特段、言及することはない。

#### C 委員（評価 4）

自己点検・評価および外部評価を定期的実施するとともに、学生モニター制度を積極的に活用して学生の意見を収集している点が評価できる。

また、各評価で出された意見等を、その後の活動に生かしている点も評価できる。

#### 【基準 7】 管理運営について

管理運営体制及び事務組織が整備され、機能しているか。

管理運営に関する方針が明確に定められ、それらに基づく規定が整備され、各構成員の責務と権限が明確に示されているか。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されていること。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A 委員（評価 3）

図書館の職員体制について、多岐にわたるサービスに加え、平日は午後 10 時までの開館、土日祝日の開館など、限られた職員数の中での対応は、負担を伴うものであると思われる。また、非常勤職員が職員数全体の約半数を占めており、業務スキルの安定した継承という点でも課題があるのではないか。図書館のサービスは人の力に寄るところが大きいので、スタッフの安定確保（維持・拡充）は重要である。

##### B 委員（評価 4）

静岡本館と浜松分館に分かれていても、書類的な対応は問題なく処理できるだろうが、業務はお互いに人数が少ないと思う。その状況においても連携して運営している点は評価できる。既に基準 3 でも指摘したが、附属図書館の機能を充実させるためには常勤の図書館職員の増員を大学執行部に要求するべきである。むしろ、浜松分館が別の組織になった時の人員の配置が気になる。浜松分館は浜松医科大学の職員が見かけ上は増えるが、物理的に離れたままである。既に検討しているかも知れないが早めに準備しておく必要はある。

#### C 委員（評価 4）

管理運営のための事務組織が適切に組織されている。静岡の本館、浜松の分館をともに運営するための適切な職員配置がなされている。また、目的に応じてワーキンググループを設置するなど、柔軟な運営がなされている。

非常勤職員により現在の業務が維持されている部分もあると考えるが、現在実施されている業務に加え、今後附属図書館が対応を迫られるオープンサイエンス、オープンデータや研究支援などの業務に対応するためには、現在の常勤職員数は維持する必要があると考える。

#### 【基準 8】 情報等の公表について

活動情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

#### <外部評価委員によるコメント>

##### A 委員（評価 4）

まとまった情報の提供としては、紙媒体での広報が有効であり、図書館概要、図書館通信、Newsletter は今後も重要な役割を果たすと考えられる。それとともに、大学に限らず、若い人を中心として SNS による情報収集は大きなウエイトを占めるようになってきており、ホームページやツイッター等を活用しての情報公表は重要であると思う。

##### B 委員（評価 4）

ホームページは改善させている。ツイッター・フェイスブックも活用しているので、高く評価できる。この類の仕事は、学生も含めて若手職員にもっと奮起してほしい。公開情報のユーザーは、広い年齢層であるが、一番利用して欲しい年齢は学生である。彼らの感覚は、残念ながら年配層には理解しにくい。それに応えるには若手職員であろう。

##### C 委員（評価 4）

平成 30 年度末に更新されたホームページが分かり易く、英語版も整備されている点、図書館概要、図書館通信等で積極的に情報が公表されている点も高く評価できる。

今後は、Facebook などの新しい広報ツールについても、その効果と導入にかかる人的コストを勘案するとともに、若手職員の力を生かして検討を行って欲しい。

#### 【基準 9】 地域貢献活動の状況について

附属図書館の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

<外部評価委員によるコメント>

A委員（評価4）

附属図書館の使命の一つに「社会連携」を掲げており、各種イベントの開催や、一般市民への公開と貸出、県内公共図書館と連携協力しての相互貸借など学内でのサービスに留まらず、文化力向上のため広く門戸を開放する取組を評価したい。

B委員（評価3）

地域貢献活動は適切に実施されている点を評価する。地域貢献活動は必ず使命の項目に入っており、重要であることは間違いない。しかし、大学の附属図書館の本筋は大学の教育・研究を支援する組織である。本筋に負担のかからない範囲で活動して欲しい。

C委員（評価4）

通常の国立大学図書館としての地域貢献活動は実施されている。静岡大学地域連携応援プロジェクトの一環として行われている企画は、参加者も多く評価できる。

「附属図書館の使命」に地域社会への貢献を明示することで、組織として活動の位置付けが明確となっている点が高く評価できる。

【基準10】国際化の状況について

附属図書館の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

<外部評価委員によるコメント>

A委員（評価3）

ホームページや図書館利用テキストの英文化による、国際化への基本的な対応は取組の成果といえる。さらに、外国人留学生の国別比率等への考慮も可能であれば対応していくことが望ましいと思われる。

また、ルーチン化には課題もあると思われるが、図書館サービスの中で留学生の力を借りる工夫も考えられるのではないか。

B委員（評価3）

国際化に向けて支援や資料等で対応していることはわかる。それぞれの国によって理解と感覚は異なるので、留学生の多い国、中国やベトナム・インドネシア出身の大学院生をカウ



ンセラーなどに活用する方法を検討してみてもどうか。

#### C 委員（評価 4）

掲示、館内案内等の英語化、留学生向けの利用案内など、基本的な対応は行われている。

今後は、他大学の事例も参考にするとともに、具体的な計画を作成し、大学の方針に沿った国際化に向けた対応を進めて欲しい。その際、学内の関係部署との連携も併せて進めることを期待したい。

### 3. 総合評価

ここでは外部評価委員から総合評価として提出された、全体を通してのコメントを記載する。

#### A 委員

静岡大学の使命である「教育」「研究」「社会連携」を支援する知の収蔵庫としての機能を円滑かつ精力的に果たしているといえる。

施設設備等ハード面での修築・改良を含め、時代が求める大学附属図書館として、組織的・積極的に利用者のニーズに応えようと取り組んでいる姿勢が、資料、説明、実地見学から伝わってきた。

予算面、人事面、また予定される統合等を含め、課題や未確定な要素もあると思うが、今後も静岡大学が県内最大規模の総合大学として、その使命を果たしていくために、附属図書館としての最良のサービスを継続して欲しい。

#### B 委員

静岡大学の場合は静岡本館と浜松分館に分かれているが、調和して運営している点は高く評価できる。大まかに言えばこの一言に尽きる。

物理的距離として離れている附属図書館の運営を客観的に評価するためには、実際に離れた図書館を運営している信州大学の事務方か図書館長を外部評価委員に加えるとお互いに相乗的な評価があると感じる。

既に記載しているが、浜松キャンパスと静岡キャンパスを分離した場合、附属図書館の立場がどうなるのか、事態が起こる前に事前に検討しておくべきである。

#### C 委員

館長、分館長のリーダーシップの下、通常の業務に加え、自己点検・評価の実施、学生の力を図書館運営に生かす取り組みなど、創意工夫が凝らされ、非常に活発な図書館運営が行われている点が高く評価できると考えます。

今後、浜松医科大学との統合に向けて組織再編が予想される等、管理運営の基本的な点で未知数の部分が多いと思われませんが、引き続き、学生を中心とする利用者の声を生かし、職員の力を最大限生かす運営を進めることで、大学内での存在価値をより高められることを希望します。